



こーひーぶれいく

古本市が好き！

神野 郁夫

Kanno Ikuo

古本が好きだ。古書ではなく、単にセコハンの本だ。出張先でたまたま古本屋に出会えば覗く。英語圏の国でも研究所の街に露店の古本市があると、心拍数が上がる。ヨセミテ国立公園への途中、マーセドでは Jack Higgins のペーパーバックを山にした店があったが、旅行中とあって2冊しか買わなかったことを今でも悔やんでいる。Amazon で取り寄せた本に、サリー市図書館のスタンプがあったりすると嬉しい。ノース・テキサス大があるダウンタウンの古本屋で、探していた本の著者と内容等を店員に説明すると、2階のコンテンポラリーに行け、と追い払われた。探すのに時間がかかりそうだと、思いつつ書棚を見ると、著者順に並べられてあり、すぐに目当ての“Canter’s Dilemma”を発見した。私がよほどうれしい顔をしていたのが、会計のため1階に下りた私を先の店員が見て、「あったのか」と言ってくれたのは、よく覚えている。

京都には年に3回、古本市がある。平安神宮近くの「みやこめっせ」(5月1日～5日)、下鴨神社の森(8月11日～16日)、そして百万遍知恩寺(10月30日～11月3日)だ。みやこめっせでは古本屋ごとではなく、会計は1か所で処理される。絶版だから多少高くても仕方ない、と買ってカゴに入れた本が、別の店に安価で置いてあると天下を取った気分だ。糺の森では蚊に刺されながら物色する。汗臭いおじさんが大勢いるので蚊に食われたことがない、と女房は言う。そのおじさんの1人が私だ。秋の午後に読経のコーラスを聞きながらうろつく知恩寺もまた良い。

もちろん古書店は京都市内に多数あり、癖のある店も多い。鯖街道の終点として有名な梶形商店街に

も近年、古本屋ができた。小さい構えなので、ひととおりに見るのに30分もかからない便利な店だ。不要な本3冊で100円の本1冊と交換可能だ。

もちろん私も新品の本を買う。大学生協の本屋には私の存在確率がある。しかし新本購入の閾値が高いことも事実である。その点、古本は閾値が低く、反応が起きやすい。

古本市へ来給え。特に糺の森と知恩寺だ。様々なジャンルの古本が犇めいている。音楽、エンタメ、戦争、宗教、科学等、古本屋ごとの特徴が見える。それらの中に、文庫本が雑然と陳列された棚があり、「1冊100円、10冊700円」のサインが見える。もちろん私は好みの著者がいないが、端から見ていく。しかし1つの古本屋の文庫棚で10冊を発見することは困難だ。そこで好きかもしれない題目で、しかも分厚い本を選ぶ。8冊でも10冊でも700円だから、面白くないかもしれないが、選ぶ。そう、よくは知らない本を買うことに古本市の良さがあるのだ。

書店に見当たらない本を買うためにAmazonを使うが、これは欲しい本が分かっているからできることだ。古本市の利点は、知らない本を買うことで、新たに好きな著者を見出すことだ。

「レッド・オクトーバーを追え」で初めてTom Clancyを知り、その後、30年ほど、著作を読み続けている。2013年に他界した彼の作った世界を他の著者が引き継いで、今も著作が出ている。David Huntの「魔術師の物語」は分厚かったから10冊の中に入れた本だ。しかし読み始めてすぐに他とは違うものを感じた。ペーパーバックでも読み、著者の次作も手に入れた。これには日本語訳がない。須賀しのぶの「革命前夜」も内容が重厚だ。歳を重ねつつ好みの著者が増えるのは嬉しい。

どうだ。あなたも古本市に来たくなっただろう。知恩寺は京大吉田キャンパスのすぐ北にある。発見した本の世界に浸るための喫茶店も、周囲に多数ある。

(京都大学大学院工学研究科)